

## 工場は立派でも寂しい町 娯楽と言ったらパチンコ

海に面した工業団地。遠方にはコンビニナートのいくつもの高い煙突が見える。どれも白煙を出している。大手メーカーの下請け会社の元製造係長のAさんにとっては日常の見飽きた光景なのだろう。窓の外には視線を向けなくて、アイスコヒーのストローを何度も口に運んだ。人通りは少ないが、バス通りに面した数少ない喫茶店。モーニングとランチサーブが人気で結構繁盛している、とAさんは語った。最初の面談は、来客の少ない平日の午後を選んだ。職場を抜けることは会社の許可を得ていた。

本題に入る前に、Aさんから意外な言葉が出た。

「まあ、工場は立派でも寂しい町ですから、娯楽と言ったらパチンコぐらいしかないね。三百六十五日、毎日がパチンコですよ」と、照れ笑いの表情で語った。「えっ、毎日ですか」と、この言葉がオーバーな表現と知りつつ問いかけた。「まあ、そんなものです。一人ならね。みんなが集まれば酒だけだ」

# パチンコ依存

第3回

新「相談現場からの報告」

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

## 「私も一緒に」と妻が言った その賢さになんとか「セーフ」

という返答だった。

この「毎日がパチンコ」と豪語するAさんの生活スタイルに興味を持ちつつ、いったんこの話は断ち切った。ただ、やや横柄な態度に、相談内容との関連性が少し見つけたような気がした。

### もともとの相談内容は パワハラの加害行為で

Aさんは40代後半。工業高校を卒業後入社して30年。部署替えはもちろんあったが、一貫して製造現場での作業。これだけのキャリアからくる技能と専門知識は、周囲のだれもが認めていた。係長になったのも同期入社組では一番早かった。しかし、この係長の肩書に「元」とつけなければいけないことが、今回の相談の理由だった。面談の直前、Aさんは降格処分を受けた。理由は就業規則に違反する行為、具体的には部下への暴力と罵倒というパワハラに加害行為だった。指導の範疇を超えた行為としてAさん自身も認め、5日間の出勤停止と降格処分を受け入れた。面談時点では総務部付け。いずれ正式な配属先が言い渡されることになっていた。



これまで、処分には至らなかったが、部下に対するAさんの荒っぽい態度は、以前から話題になっていた。技術への自信に加えて親分肌の性格。Aさんは「人とのつきあい方が下手なんです。苦手です。言葉も知らないから自分からやってみて教えた方が早いし」と語るAさん。じれったくてつい手の方が早く出てしまつたという。

降格処分になったとはいえ、会社にとっては欠かせない存在のAさん。年月を重ねて身に着いた技術は後輩に継いで欲しかった。しかし、このままでは同じことを繰り返す可能性がある。展開によっては、解雇せざるをえないことも十分に考えられる。性格を変えることは難しくても、なんとか部下対応の方法を改善することはできないか。そういう意図でカウンセリングが始まった。会社からの依頼を本人も受け入れた。

## 「性格とか考え方を 変えなければだめよ」

面談がスタートしたのは夏の終わり。日中はまだ暑かった。エアコンがきいた喫茶店だったが、Aさんがしきりに汗をふくのは少し

緊張していたせいでもあったろう。大柄な身体を小さくして、「申し訳ありません。こんなところまで来ていただいた。しかも恥ずかしい内容なのに」としきりに恐縮していた。部下に対して厳しく当たる様子が伝わってきたが、同時に憎めないタイプ、という印象でもあった。

そしてAさんは「実は、いったんは会社を辞めようと考えました。それでも、ここで自分の力を十分発揮してきたし、これからだつて若い連中の先頭に立ってやっつていこうという思いが強くなって、どうすればいいだろうと女房と一緒に、それこそ寝ないで話し合った日もあります」と語り始めた。妻はスーパードパート勤務。子供はいなかった。話し合いの結論は、「あなたは根っからの頑張り屋で負けず嫌い。だからここここまで上ってきたのよ。でも、相手にも自分と同じことを望みすぎてきたのじゃない？その性格とか考え方を変えなければだめよ」という妻のまとめにいきついた。自分を否定されるとついカツと成り怒ってしまうAさんは、相手が妻でなければ、場合によって

は手が出ていたかもしれない。しかし、妻には頭が上がらなかった。「自分を見つめ直すために、カウンセラーと話し合ってみないか」と人から勧められている。どんなもんだらうか」と妻に話しかけた。妻は「会社が動いてくれるんだつたら絶対に断つたらだめよ。まだあなたに期待しているからこそ、そういう誘いもしてくるんじゃない」と答えた。なるほど、妻はいつも冷静だな、とAさんは頭を下げたという。

## 「部下にきつい押し付け 配慮が足らず」と理解

初回の面談から、Aさんの考え方のクセが対人関係を円滑にできないことに影響している、と判断した。「自分は結構柔軟だと思えますよ」と語っていたが、一番のクセは〈完璧主義〉、そして〈すべき思考〉。このクセには共通点がある。〈完璧主義〉は〈全か無か思考〉とも言われる。ものごとを白か黒かの両極端で考えてしまうタイプ。作業はマニュアル通りにやらなければいけない、絶対にルールは守らなければいけない、と考えるのがAさんだった。この考

え方が自分の基準になってしまい、いつも「こうすべきだ」と部下に接するようになる。

この考え方自体は素晴らしいし、業務推進には欠かせないが、このような価値基準で若い連中に接すると、相手との関係がぎくしゃくしてくることをまずAさんには分かたせようという話を進めた。チームワークが大事な職場では、自分の判断基準だけで動いてはいけないこと、メンバー一人ひとりにも基準があることを理解してあげることが大事と説明、次第に理解してもらっていった。

「こんなことも分かんねえのか、この野郎」とつい暴言になってしまつた際に、「ちょっと待てよ。こいつの考えはこういうことか。なるほど。それならこつちの出方も変えなければ」という変化は、わずか数秒、一呼吸で十分生じることについて、「言われてみればそうです。配慮が足りませんでした」と返答をもらうことができた。

真剣に面談に応じてきたことに感謝し、この考え方のクセがこれからの仕事の場で生かされれば、「仕事ができて心も広い人」として、一層職場でも重宝される存在



になること間違いはない、と背中を押した。

## ヒマな若い時に誘われて千円が「10倍」に化けた

部下にとつてはキツイ上司だったAさんが、妻の前ではおとなしくなっていることに別の意味で関心があった。「三百六十五日、毎日がパチンコですよ」という最初の表現も気になっていた。本題が一段落してからこの真相を知りた

くて、さりげなく話題を変えたら、この二つのエピソード、つまり妻との関係とパチンコの一致点が明らかになった。

工場は二十四時間のシフト勤務。3交代で日勤、昼・夜勤、深夜勤を繰り返してきた。労働時間は特別な繁忙期以外は常に一定。元々仕事熱心で頑張り屋。器用な一面もあって同年代の仲間の中では一番早く仕事を覚えていった。入社した頃の悩みと言えば、工



場を離れると退屈なこと。特に深夜勤務明けで朝8時に工場を出た後の日中は時間を持て余した。朝から酒を飲むわけにもいかない。眠いことは眠いが、朝の陽ざしを浴びるとすぐふとんにもぐることに抵抗があった。何よりも若くて元気だった。

朝十時の開店にかけこむという。先輩からは「いいか。身体はくたびれているから昼は眠れ。その前の午前中だけの遊びだから。それだけは忘れるな。それから決めた金額以上は使わない。金がなくなったら帰って寝るんだぞ。それができないと思ったら初めからやるな。強制してはいないから」と言いくるめられていた。

入社した頃の悩みと言えば、工場を離れると退屈なこと。特に深夜勤務明けで朝8時に工場を出た後の日中は時間を持て余した。朝から酒を飲むわけにもいかない。眠いことは眠いが、朝の陽ざしを浴びるとすぐふとんにもぐることに抵抗があった。何よりも若くて元気だった。

時間を持て余すことが多かったAさんには願ってもない誘いだった。興味もあった。店には同じ工場の顔ぶれ以外にも、他工場の従業員と思われる客もいた。女性の姿も珍しくなかった。若い女性も年配者も。自動機械で玉を購入した後、空いていた台に向かって、周囲の客のやり方を真似てハンドルを握った。パチンコ台が光り出し、真ん中の回転ドラムのようなものが回る場面が連続した。眠気を吹き飛ばすような音と光。画面にそろそろ三つの絵柄。玉がはじき出される受け皿がいっぱいになり、次第に玉が玉を押し出すようになって膨らんできた。これも見よう見真似でプラスチックの箱に入れ、すぐにハンドルを握り直した。

「やるじゃないか」という誘ってくれた先輩。一方で「やみつきになるなよ。楽しむだけでいいぞ」という声もあった。

**日常の表情の変化を見逃さなかった妻が**

この初日の快感が後々までAさんの心を支配した。元々が向こう見ずに行動するタイプ。すぐ資金がなくなる日もあったが、深夜勤務明けの行動から、日勤の日、夜勤前の午後、さらには休日、とパチンコに通う日が増えていくことを止めることはできなかった。これが「毎日がパチンコ」というAさんの日常だった。

妻には黙っていても、この状態を隠すことはできなかった。ふだん家にいるはずの時間にいない。表情が暗い日が多い。かと思うと好きなものでも買えと大金を渡す日もある。眠気を訴える。好きな酒の量も多かったり少なかったりする。いつもと違う夫の変化を黙って見過ごすことはできなかった。「何かある」と察知した妻は、休日のある日、夫を追跡した。向かった先がパチンコ店だった。妻はある程度は予想していたので納得



これまで、処分には至らなかつたが、部下に対するAさんの荒っぽい態度は、以前から話題になっていた。技術への自信に加えて親分肌の性格。Aさんは「人とのつきあい方が下手なんです。苦手で。言葉も知らないから自分からやってみて教えた方が早いし」と語るAさん。じれったくてつい手の方が早く出てしまうという。

降格処分になったとはいえ、会社にとっては欠かせない存在のAさん。年月を重ねて身に着いた技術は後輩に継いで欲しかった。しかし、このままでは同じことを繰り返す可能性がある。展開によっては、解雇せざるをえないことも十分に考えられる。性格を変えることは難しくても、なんとか部下対応の方法を改善することはできないか。そういう意図でカウンセリングが始まった。会社からの依頼を本人も受け入れた。

## 「性格というか考え方を 変えなければだめよ」

面談がスタートしたのは夏の終わり。日中はまだ暑かった。エアコンがきいた喫茶店だったが、Aさんがしきりに汗をふくのは少し

緊張していたせいでもあったろう。大柄な身体を小さくして、「申し訳ありません。こんなところまで来ていただいて。しかも恥ずかしい内容なのに」としきりに恐縮していた。部下に対して厳しく当たる様子が伝わってきたが、同時に憎めないタイプ、という印象でもあった。

そしてAさんは「実は、いったんは会社を辞めようと考えました。それでも、ここで自分の力を十分発揮してきたし、これからだつて若い連中の先頭に立ってやっていこうという思いが強くなって、どうすればいいだろうと女房と一緒に、それこそ寝ないで話し合った日もあります」と語り始めた。妻はスーパードパート勤務。子供はいなかった。話し合いの結論は、「あなたは根っからの頑張り屋で負けず嫌い。だからここここまで上ってきたのよ。でも、相手にも自分と同じことを望みすぎてきたのじゃない？その性格というか考え方を変えなければだめよ」という妻のまとめにいきついた。自分を否定されるとついカッとなつて怒つてしまふAさんは、相手が妻でなければ、場合によって

は手が出ていたかもしれない。しかし、妻には頭が上がらなかつた。「自分を見つめ直すために、カウンセラーと話し合ってみないか」と人事から勧められている。どんなもんだらうか」と妻に話しかけた。妻は「会社が動いてくれるんだつたら絶対に断つたらだめよ。まだあなたに期待しているからこそ、そういう誘いもしてくるんじゃない」と答えた。なるほど、妻はいつも冷静だな、とAさんは頭を下げたという。

## 部下にきつい押し付け 「配慮が足らず」と理解

初回の面談から、Aさんの考え方のクセが対人関係を円滑にできないことに影響している、と判断した。「自分は結構柔軟だと思ひますよ」と語っていたが、一番のクセは〈完璧主義〉、そして〈すべて思考〉。このクセには共通点がある。〈完璧主義〉は〈全か無か思考〉とも言われる。ものごとを白か黒かの両極端で考えてしまうタイプ。作業はマニュアル通りにやらなければいけない、絶対にルールは守らなければいけない、と考えるのがAさんだつた。この考

え方が自分の基準になつてしまい、いつも「こうすべきだ」と部下に接するようになる。

この考え方自体は素晴らしいし、業務推進には欠かせないが、このような価値基準で若い連中に接すると、相手との関係がぎくしゃくして、相手をまずAさんには分かってもらうように話を進めた。チームワークが大事な職場では、自分の判断基準だけで動いてはいけないこと、メンバー一人ひとりにも基準があることを理解してあげることが大事と説明、次第に理解してもらつていった。

「こんなことも分かんねえのか、この野郎」とつい暴言になつてしまふ際に、「ちょっと待てよ。こいつの考えはこういうことか。なるほど。それならこつちの出方も変えなければ」という変化は、わずか数秒、一呼吸で十分生じることに、言われてみればそうです。配慮が足りませんでした」と返答をもらうことができた。真剣に面談にに応じてきたことに感謝し、この考え方のクセがこれからの仕事の場で生かされれば、「仕事ができて心も広い人」として、一層職場でも重宝される存在